

船 揃 (風流船揃)

安政三年(1856)二月

作詞 織 月亭

作曲 二代目 杵屋勝三郎

〈本調子〉

そもそも船の始まりは 唐土皇帝に仕へし 貨狄といへる臣下あり
秋吹く風に庭の池へ 散り浮く柳の一と葉の上に 蜘蛛の乗りて
ささがにの 糸引きはへし姿より 匠み出だせし船とかや

見渡せば海原遠く真帆片帆 行きかふ船の数々は

霞の浦に見え隠れ 白波寄する磯近く 千鳥鷗の浮き姿

網曳く船や釣舟の 皆漕ぎ連れて 行き通ふ 眺め長閑き春景色

面白や

筑波根の 峯より落つる水筋も

積もり積もりて秩父より 清く流るる隅田川

月よ花よと漕ぎ出だす 屋形屋根船 猪牙荷足 御厩隅田の渡し舟

遙か向ふを 竹屋と呼ぶ声に 山谷の堀を乗り出だす

恋の関屋の里近く 花見の船の向島

軒を並べし屋根船の 簾の内の爪弾は もしやそれかと人知れず

気をもみ裏を吹き返し 追手の風に

〈三下り〉

上汐に 佃々と急いで押せば 又上手から二挺三味線弾き連れて

様はさんやの三日月様よ 宵にちらりと見たばかりしよんがいな

負けず劣らぬ 行き合の 船の横から三筋の糸に

二挺鼓を打つやうつつの浪の船

自体我等は都の生まれ色にそやされこんな形になられた

見事な酒は多けれど 聞いてびっくり丸三杯呑んだ盃

つつい ついのつつい

面舵取舵声々に 乗りしお客の気も浮かれ

ゴウチエイハマカイ 払って一拳押へましょ

拳うちやめて踊るやら 扇鳴らして唄ふやらしどもなや

賑はふ隅田の川面は これぞ真の江戸の花

栄ふる御代こそ目出たけれ 栄ふる御代こそ目出たけれ

